

「将来の地域の担い手」を育てるために 五郷中の取組

はじめに

平成 27 年に文部科学省から「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き」が通知された。この通知が出された背景として、児童生徒が多様な考えに触れ、認め合い、協力し合い、切磋琢磨するためには、一定の集団規模が確保されていることが望ましいと考えられている。しかし、その通知には、学校は各地域のコミュニティの核としての性格も有し、学校教育は地域の未来の担い手である子供たちを育む営みでもあるため、学校が地域コミュニティの核として大きな役割を果たしている場合は、このことを十分に考慮しなければならないとも記されている。

本校は全校生徒 6 名という過小規模校であり、多様な考えに触れ、切磋琢磨するにはあまりにも少なすぎる。しかし、地域と一体となった学校行事等をとおして地域コミュニティの核として大きな役割を立派に果たし、それぞれの行事等において生徒がその活動の中心となり、協働して大きな責務を果たす中で主体性や協働性を培い、未来の地域の担い手として立派に成長している。

今後とも、日々の授業実践や様々な活動をはじめ、小中連携や地域連携を生かした小中連携型コミュニティスクールへの取組（平成 30 年度移行）、少人数ゆえの課題解決に向けた交流学习への取組（平成 29 年度より神上中学校と実施）、小中一貫教育を目指した研修など少人数ゆえの強みや地域の強みを生かして教育活動を進めていきたい。



五郷中学校の取組

研究テーマ

『確かな学力を育む授業づくり』

～繋がりのある学びを目指して～

目標

- ・ 確かな学力を身につけ、主体的・協働的に課題を解決する力を養い、将来の夢に向かって自己実現をする力の育成
- ・ 少人数を生かした細やかな指導の充実

課題設定の理由

本校では、昨年度より少人数の強みを生かした効果的な授業方法について研修を進めてきた。しかし、生徒数の多い学級で4人、少ない学級では1人という状況において、少人数の強みを生かすには過少人数であり、「学び合い」学習やアクティブ・ラーニング的な手法をとることも難しく、なかなか具体的な有効策を見いだすことができなかった。しかし、この地域の特徴でもある「地域と一体となった学校行事」等をとおして生徒がその活動の中心となり、協働して大きな責務を果たすという経験やまた少人数であるからこそ一人ひとりの「役割や責任」が大きくなり、自ら考えて行動しなければ完結しないという経験は主体性や協働性を培い、教科での学力や生きる力にも効いてくる「学びの基礎力」を育てることができると考えた。地域の人々が子どもに期待することは「将来の地域の担い手」である。学校教育は地域の未来の担い手である子どもたちを育む営みであることを考えた時、本校が求められるものは、「主体性」「責任感」そして地域の担い手として「たくましく生きる力」の育成である。そのための基礎的スキル（他者と協力する態度、つながりを尊重する態度、嫌なことでもやり遂げる態度、学びを律する態度など）を身につけるため、地域の協力を得ながら、教科横断的な視点で取り組み、学校行事等「地域に教育課程を開いていく」ことで、豊かな体験を通し「生きるための力」を育成したいと考えた。

実践

(1) 地域の実態と「学力」のとらえ

五郷町は高齢化が進んでいるにもかかわらず、人口の減少はあまりない。それは毎年人口1%の転入者を目指した取組が実施されており、他府県から若い家族を迎えているからである。地域による取組の努力により、小中学校ともに子どもの数は少数であるが、欠学年はない。豊かな自然とともにこの地域には「温もり」があり、支え合う「共生」の文化が根付いている。小中連携にとどまらず、校区にある保育所、地域の諸団体との連携も相まって、様々な学校支援や体験活動、また地域行事に相互の支援協力

を行っている。子どもたちの育ちについて地域の積極的なかかわりがあり、人口が少なくても「強いつながり」がある。「競争社会」ではなく「共生社会」のなかで学校と地域が一体となった各種行事も実施されている。

地域の人々が子どもに期待することは「将来の地域の担い手」である。学校教育は地域の未来の担い手である子どもたちを育む営みであることを考えた時、本校が求められるものは、「主体性」「責任感」そして地域の担い手として「たくましく生きる力」の育成である。このことが本校における「学力観＝生きる力」のとらえであり、学力向上の取組の根幹であると考えられる。

I 学校の概要



五郷地区

高齢化

人口の1%の転入者を目指す



他府県から若い家族を迎える取組

「共生」の文化

取組の仮説

課題

少人数ゆえ、多様な考えに触れたり人間関係を構築する力が弱い。
言葉がたりなくても意思疎通ができてしまいコミュニケーション力が弱い

課題に対する仮説

様々な体験活動や地域の人との触れ合い、異年齢・同年齢集団とのかかわりを通じて主体性や協働性が求められる場面を意図的に設定する

主体性

協働性

課題を解決する力・自己実現する力が育つ
学力向上につながる学びの基礎力

「将来の地域の担い手」としてたくましく生きる力

(2) 取組の概要

本校では昨年度より県の学力向上アドバイザーである竹内氏をむかえ、少人数の強みを生かした効果的な授業方法について研修をすすめてきた。生徒が主体的に学ぼうとする授業の創造、少人数指導の効果的な方法についての研究である。また道徳の教科化に備えた全校道徳や小中合同での授業の在り方も模索してきた。英語科を中心とした乗り入れ授業や小中合同での授業など積極的な小中交流を図ってきた。

本校は全校生徒6名という極小規模校であり、様々な考えにふれたり、切磋琢磨するには余りに少ない環境である。しかしながら、豊かな自然、温もりのある地域の人々に見守られながら、子どもたちは素直に育っている。少人数ゆえに「競争」により切磋琢磨する機会は少ないが、「共生」による協働の機会は多い。また少人数ゆえに一人ひとりが担う役割が大きい。このことがまさに「少人数ゆえの強み」でもある。様々な体験活動や地域の人々との触れ合いの場面を「意図的」に設定することにより、その責務を果たすために必然的に「協働」が求められ、その活動を通して主体性や協働性を身につけることができる。「少人数による強み」をいかした「共生」によるたくましさを育成できると考える。



地域と共に学校教育を考える時代と言われるが、本校では地域や子どもの実態に即した「地域に開かれた教育課程」そのためのカリキュラム・マネジメントの確立のため、子どもたちがつけるべき力を明らかにし、教科横断的な視点から教育活動の改善を図り、活動の場面を校外に求めながら、学校全体としての取組を通じて教科や学年を超えた運営の改善を図ってきた。

課題設定の理由

学校
1人〜4人での授業
少人数

「学び合い」や「アクティブ・ラーニング」の手法が取りにくい……

期待

将来の地域の担い手

五郷地区
1%の増加をめざす取組
共生の文化

多様な考えに触れる機会
様々な人間関係を構築する機会

少

一人ひとりの役割
協力しなければ終わらない経験

多

＝ 主体性 責任感 協働性

たくましく生きる力 … 学力向上につながる「学びの基礎力」

地域と共に

取組について

実践例 1

合同運動会



地域の行事の運営

役割を果たすこと

主体性

責任感

いる。そのなかでも中学生における役割は大きい。地域の人に交わりながら、前日までの準備や当日の運営などに取り組むが、自分たちの仕事や役割を果たすことによって責任感が育ち、また小学生を指導したり、保育園児に目を配るなど、個々に「地域の担い手」としての自覚も生まれてきている。地域の方々にも子どもたちの成長を感じていただく、大きなイベントとなっている。

(3) 地域とともに

五郷地域は米づくりが盛んである。水がきれいで蛍の生息地として有名であり、「ホタルのヒカリ」と名付けた米作りに取り組んでいる。本校でも「ふるさと創生実行委員会」や地元婦人会の協力を得、小学校と共に米作り体験を行っている。

この体験活動でも小学生に気遣ったり、やさしくアドバイスをする中学生の姿が見られる。また「将来はこの地で農業をする」と宣言する生徒もおり、地域の担い手として育ってきている姿も見られる。

自分たちで作った米の収穫を祝い、そしてご協力いただいている地域の皆さんや五郷の豊かな自然に感謝の気持ちをこめて「収穫祭」を実施している。小中合同で行う「収穫祭」では学校が地域に感謝を伝える機会として行っているが、地元婦人会の方も、朝早くからご協力いただき地域のみなさんと会話をしながら郷土料理をいただく。「子どもたちに元気をもらった。来年も楽しみ」という声を多くいただく。

実践例 2

小中合同「農業体験」



地域の豊かな自然

小学校との交流



郷土への思い

思いやり

実践例 3

文化祭・収穫祭



収穫祭での地域の人たちとの触れ合い

文化祭での「郷土劇」

感謝

自己有用感

すらすらと涙を浮かべ達成感と自己有用感に満ちあふれた笑顔で応えていた。

また秋の文化祭にも多くの地域の方に来校いただく。昨年度は200人ほどであったが、町の人口が800人ほどであることを考えるとおよそ4分の1の方々に来校いただいたことになる。子どもたちが演じる五郷地区を題材にした郷土劇には、涙を流しながら「感動した」「来年も楽しみにしている」と子どもたち一人ひとりに声をいただく。涙を流しながら感謝と喜びを伝えてくれる地域の皆さんに、子どもたちもうっ

「子どもたちの元気」は地域の温もりに支えられ、「地域の温もり」は子どもたちが支えている。

(4) 交流学習

豊かな自然や地域の人たちに見守られながら、子どもたちは素直に成長しているが、多様な考えに触れる機会があまりに少ない。特に同年代との活動による経験が不足している。そのため今までのくろしお学園との交流学習に加え、小学校との合同授業や今年度からは神上小中学校との交流学習もすすめている。同年代の多くの仲間と学び、様々な考えや思いにふれ、多くの気づきを得ること。お互いに思いや考えを伝え合い理解する力も育んでいきたいと考えている。第1学年からの交流であったが、現在は全校での交流に広げ、全校体育を実施している。

実践例 4
交流学習

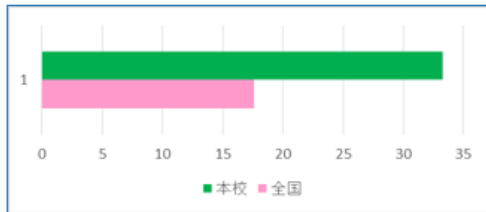
神上小中学校との交流
くろしお学園との交流
同年齢・異年齢との交流
小中合同ダンス

様々な思いに触れる経験
協働性 コミュニケーション力

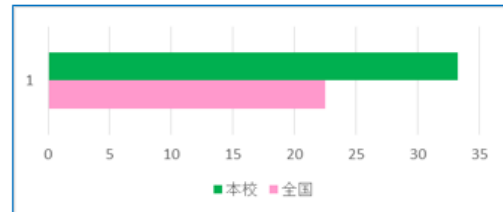
第1学年からの交流であったが、現在は全校での交流に広げ、全校体育を実施している。

「主体性」について

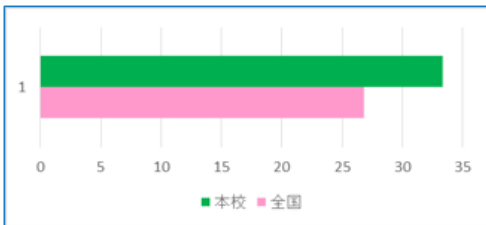
友達の前で、自分の意見を発表することは得意である。



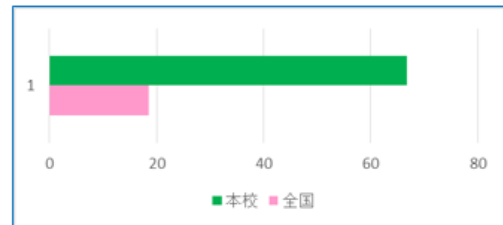
授業で学んだことを他の学習や生活にいかしている。



自分達で立てた課題に対して、自ら考え自分から取り組んでいる。

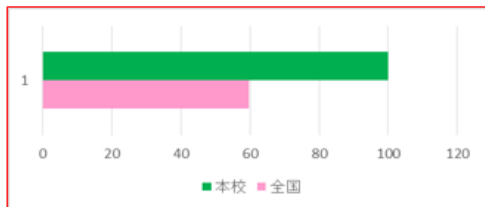


自分で計画を立てて勉強している。

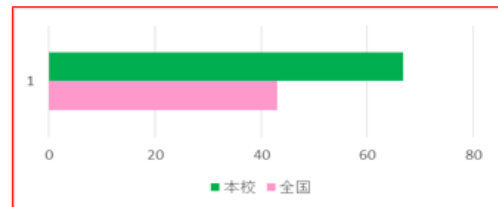


「協働性・コミュニケーション力」について

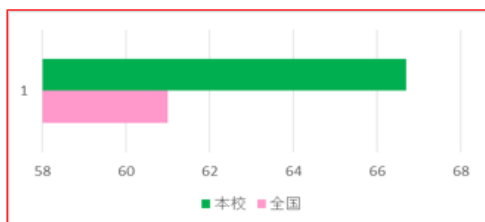
友達と話し合う時は、友達のことを最後まで聞く。



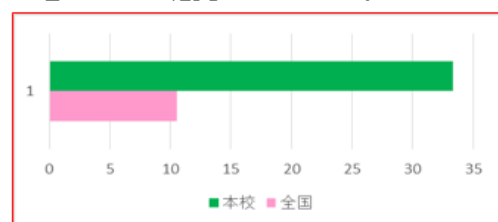
友達のことを受け止めて、自分の考えを持つことができる。



みんなと協力して何かをやり遂げてうれしい。

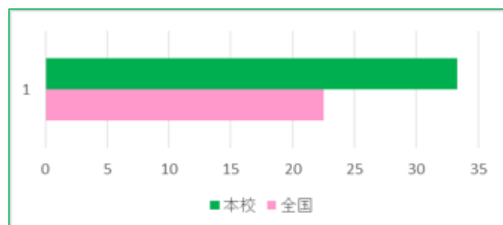


自分と異なる意見や少数意見をいかしたり、折り合いをつけて意見をまとめている。

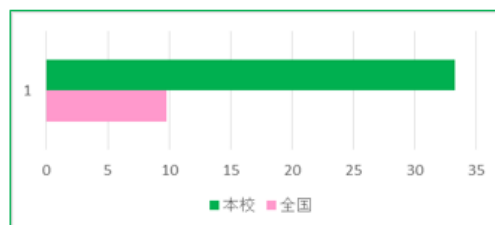


「地域」に対して

地域や社会で起こっている出来事に関心がある。



地域や社会をよくするために何をすべきか考えた事がある。



**「地域の担い手」として育っている姿
が見られる。**

H29 全国学力学習状況調査 「生徒質問紙」より

終わりに

本校では小規模であることを「強み」ととらえ、「将来の地域の担い手としてたくましく生きる力」を「確かな学力」と共通認識し、教科横断的な視点からの取組をすすめてきた。その取組は一人ひとりの主体性と協働性を大きく成長させてきていると考える。また地域とともにある教育活動は、子どもたちの自己有用感を育て、地域でたくましく生きる力に必要な「基礎的スキル」を育てている。今後も地域連携を深め「地域に開かれた教育課程」をすすめ、子どもたちを地域とともに育てていきたい。

また、本校は過小規模校の課題を解決するため小中一貫教育も視野に入れた取組を目指している。そのため、昨年度より小中合同研修会等をとおして小学校への乗り入れ指導についても研修を進めてきた。小学校の学習内容や指導方法について学んでいく中で、小・中学校における系統だった学習内容や、指導方法における着眼点の相違など多くの気づきを得ることができた。今後はこれら小学校への乗り入れ指導だけでなく、中学校における指導においても「繋がりのある学び」を大切に、9年間を視野に入れた「確かな学力を育む授業づくり」を推進していきたい。

平成28・29年度

熊野市教育委員会研究指定

熊野市学力向上支援事業

研究発表会 『研究紀要』 要約

